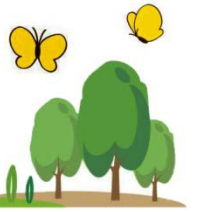




ちよつとそこまで ～お散歩日和（名言編）～



この国には何でもある。本当にいろいろなものがあります。だが、希望だけがない。

これは、「希望の国のエクソダス」（村上 龍著）に出てくる有名なフレーズです。気候変動問題をはじめとした地球環境の危機やコロナ禍、ウクライナ侵攻、身近な格差や社会保障の問題などを考えると、どうしても明るい未来や希望を語り、将来への展望をもつことが難しい時代となってきました。

だからと言って、今のままで良いとは当然ながら思いません。まして、希望は与えられるものではなく自分で創り出すものです。さらに言えば、希望とはもつべきかまたざるべきかで考えるのではなく、困難が連続する社会の中で生き抜くためにどうしても求めてしまうものです。



それに、2年前のことですが、コロナ禍のマスク対応施策で注目を集めた、台湾のオードリー・タン氏のインタビュー記事に、カナダのシンガーソングライター「レナード・コーエン」の「Anthem(聖歌)」の一節が紹介されていました。



Ring the bells that still can ring
Forget your perfect offering
There is a crack in everything
That's how the light gets in.

まだ鳴る鐘を鳴らせ
完璧にすることはやめろ
すべての物にはヒビがある
だから光が差し込むのだ

「すべての物にはヒビがある／だから光が差し込むのだ」とは、全てのものに潜む可能性を示唆していて、希望に溢れたメッセージです。そして、この言葉にどれほど勇気付けられたことでしょう。後ろ向きのエネルギーを少しでもプラスにしていかななくてはもったいないと。

最近久し振りに見直した映画に「もののけ姫」があります。この映画は、ジブリ作品の中でも珍しく、描こうとする対立軸が多過ぎて、ついうっかりしていると迷子になってしまう作品です。しかし、1つ1つのもつれた糸を、その背景を想像しながらほぐしていくと、謎解きゲームのような楽しさを内包している稀有な作品でもあります。その意味では、もっとスピノフが生まれても良かったのかもしれませんが、その意味では、タレントの中田敦彦が裏設定や独創的な解釈をYouTubeで詳しく熱く説明していますから、一度覗いてみると良いでしょう。「目からのうろこ」の、面白い体験ができると思います。

前振りが長くなりましたが、この映画の中でアシタカがモロに向かって答えた台詞が心に響きます。あの有名なカウンターテナーの名曲が流れた次のシーンです。

(山犬モロ) 「お前にサンは救えるか。」

(アシタカ) 「わからぬ。だが、共に生きることはできる。」



この作品の大きな柱の1つが、サンとアシタカのラブストーリーです。だとすれば、主人公としては「私なら救える。」と見得を切っても良かったし、そういう気分にもなれるのが恋愛の良さでしょう。しかし、そうは言わなかった。いや、むしろ「わからない」と言い切ることで、逆に精神的な強靭さを感じました。安っぽい言い方を借りれば、SDGsの思想とも繋がっていると言えるでしょうか。

それはともかく、考えてみれば、私たちは、なんでもかんでも明快な答えを求めようとしがちです。

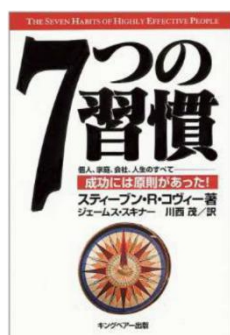
しかし、現実には曖昧であやふや、矛盾に満ちているのが当たり前です。それなのに、明確な回答を期待するが故に、そこに生きづらさが生まれているのです。その典型に、誰もが死ぬことは分かっているが、それがいつのことなのか誰も分からないという事実が挙げられるのではないのでしょうか。そこに不安が生まれるから、先回りしていろいろ知ろうとし、だから、苦しむのです。むしろ、わからないからこそ人生であり、わかってしまっただけは、人生という旅を楽しむことはできないと達観することで、得られるものは大きいとも言えるのです。

と同時に、アシタカの言葉から感じる説得力や誠実さは、希望を語るには不確実性をしっかりと受け止めることがスタートラインなんだと認識させてくれます。換言すれば、分かっていることを知ること、初めて新しい発想や、それにもとづく行動が生まれてくるということです。

ここで、希望という、前向きに生きるための果実を獲得するために成すべきことという意味で、ステイブン・R・コヴィー著「7つの習慣」にも触れておきたいと思います。その中に、

「真の成功を達成し、永続的な幸福を手に入れるためには、謙虚・誠実・勇気・忍耐・勤勉などの原理原則を体得し、自分自身の人格に深く内面化する以外に方法はない。」

という言葉が出てきます。



分かり易い事例が紹介されていました。私たちがリンゴの樹を見たとき、幹や枝葉、さらに時期によっては果実が目映ります。しかし、目には見えない地下に根があることを忘れてはいけません。昔からよく言われていることですが、根と枝葉は鏡のような存在です。と言いますのは、根の広さと同じだけ枝葉が広がるそうです。ということは、逆に言えば、枝葉を広げて多くのリンゴを実らせるためには、まず地下に根を広げる必要があるということになります。

私たちの人格や人間性は、取り出して測ることができませんし、目にも見えませんから、樹木で言う根のようなものです。そして、この目には見えない人格や人間性の大きさ、深さこそが、人生の豊かな実りをもたらすのだと言っているのです。

今の世の中、「目に見える部分」、つまり「どんな花を咲かせたか」「いくつ実をならせたか」ばかりが注目されがちです。ついつい他人と自分の花や実を比較して、焦ってしまうこともあるでしょう。そんなときこそ、「目には見えない部分」つまり「根っこ」に意識をフォーカスすることで、地に足が着いた生き方ができると思います。そして、その「目には見えない部分」を、私たちは希望と呼んでいるのではないのでしょうか。

飛び立とう 朝日に向かって
爽やかな風を 体を受けて
飛び立とう 青空に輝く
明日の希望が 僕らを誘うよ

太陽が昇りくる あふれる胸の叫び
僕らは青空に 今 吸い込まれて行く



個人的なことですが、まだ若く、熱い思いで体が満たされていた時代、当時最も好きだった曲が、この「離陸準備完了」でした。特に「今 吸い込まれて行く」の部分、「今」に続く4拍の間（ま）に蕩けるほどの心地よさを感じていました。まさに「sound of silence」です。聞き直してみると、再びその感覚が戻ってくるようです。いや、今だからこそ感じ取れる、新たな何かを呼び込みたいとの欲求がむくむくと頭をもたげてきます。それは、チェンジ（change）に、みんな（all）を加えると、挑戦（challenge）になるように、まずは、これまでの自分を少しでも変えようとしなくては何も始まらないよと優しく諭されているようでもあります。改めて、日々、「いつだって離陸準備完了」の緊張感を忘れないで生きていかなければとの思いを強くしました。とともに、アシタカの名台詞「生きろ！ そなたは美しい」が心の中で蘇ってきます。希望をもてない、今の自分へと叱咤として。（終）